

方言類義語の世代差についての一考察

——熊本県方言に於ける〈数量の多〉を表す

数量関係の副詞語彙を中心に——

井上博文

1. 方言類義語としての〈数量の多〉を表す数量関係の副詞語彙

方言語彙における類義語を方言類義語と呼ぶとき、例えば文例01～05に挙げたエライ、イッピー、ガンブリ、ダイタイのように、〈数量の多〉を表す数量関係の副詞語彙もまた方言類義語の一つとして捉えることができる。数量関係の副詞語彙に所属する一語一語は微妙な意味の違いを見せ合って彙集する、並列的な意味的關係をなし、数量程度に関わる点で程度副詞の下位分野を構成している。ここには文例02のエライのように形容詞を修飾でき、その程度性により強く関わる抽象的な語から、文例04のガンブリのように「水などの液体が容器からこぼれる程に多量に入っている」状態を表す情態副詞的な具象的な語まで幅広く含んでいる。その点では重層的な構造を持った意味分野である。

小論では方言類義語という意味的に相互に関係し合っ、まとまりのある語群を一つの単位として措定し、語彙量、語形、意味、地域性の観点から、老年層と青年層の二つの世代を比較することによって、世代差について考究しようとするものである*1

2. 調査の概要

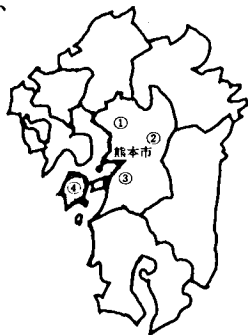
2-1 調査方法

調査は略地図に示した①玉名市石貫、②阿蘇郡阿蘇町の石、③八代市高田、④本渡市本渡町本渡の四地点で、老年層（65歳以上）と青年層（高校生）のそれぞれ二人ずつを対象に、予備調査（1984.3）で得た語と方言辞典・方言集から抜き出した語の約250語からなる調査票を用いて、一語一語の使用の有無について面接調査（1985.4）を行った。その際には以下に示した条件を満たすか否か、文体的特徴（品位、土地言葉 Or 共通語の意識、新古）、使用制限、使用頻度、具体的な文例等々について尋ねた。

〈数量の多〉に所属する語はa～cのいずれか一つまたは複数の「～」の位置に立って述部を修飾でき、「たくさん、いっぱい」の意味で用いることが可能かどうかで判断した。このうちaの条件に合致することが基本であり、cは概括的な数量を表すか否か、dは状態程度をも表し得るかどうかを確かめる為に設けた。

- | | | | |
|---|-----------|---|------------------------|
| { | a. (物、人が) | ～ | アル・オル。 |
| | b. (特定の物) | ～ | 特定の動詞。(但し、一つの動詞とは限らない) |

[略地図]



- c. (仕事は) ~ シモタ。(終わった) (概括量を表すか否か)
 d. (今日は) ~ ヌッカ。(暑い) (or 他の形容詞)

例えば、表1の「03.エライ」はaとd、「53.イッピャ」はa、「114.ガンブリ」はb、「135.ダイタイ」はaとcとを満たす。

01. エラーイ アッタ バイタ。(1-1)*² (蜜柑が) たくさんあったですよ。
 02. キョーワ エライ サミー ナー。(3-1) 今日はとても寒いねえ。
 03. ミギヤ イタラ タニヤ イーツピャ イットツタ。(1-1) (田圃の水を) 見に行ったら田にはいっぱい(水が)入っていた。
 04. シオノ ガンブリ ミットツタ。(4-1) 潮がいっぱい満ちていた。
 05. ダイタイ オワツタ。(3-1) (仕事は) だいたい終わった。

2-2 調査結果

四地点ごとに老年層と青年層の二つのそれぞれの世代で、二人とも使うと回答のあった語に○印、どちらか一人が使うと回答のあった語に△印を付し、帰納された語義的特徴や文体的特徴などを備考欄に示したものが表1である。

意味・用法の似た語を近くに配して、音訛形、派生語、複合語などの存するものについては、まず代表となる語形を示し、次いで一字下げて関係する語を挙げた。教示者は以下の方々である。(m=男性、f=女性、M=明治、T=大正、S=昭和、「m.M.34」は男性で明治34年生まれを表している)

[教示者]

	老年層			青年層		
①玉名市方言	柿添 義男氏	m.M.34	農 業	田中 正行氏	m.S.42	高校生
	大西 リツ氏	f.T.3	製本業	平島 美貴氏	f.S.42	高校生
②阿蘇町方言	山内 次郎氏	m.M.37	農 業	山本 勝之氏	m.S.43	高校生
	小糸 ノブ氏	f.M.33	農 業	高橋 玲子氏	f.S.42	高校生
③八代市方言	中山 秀雄氏	m.T.3	農 業	増田 春美氏	f.S.41	高校生
	福田 三雄氏	m.T.7	農 業	山崎 浩氏	m.S.42	高校生
④本渡市方言	久保長次郎氏	m.M.31	農 業	井上 寿氏	m.S.41	高校生
	野中ハヤノ氏	f.M.39	商 店	若杉 みき氏	f.S.43	高校生

3. 語彙量

表1を基に、各地点方言の①「○」と「△」の語数、②世代の語彙量、③老年層に対する青年層の語彙量の比率、④世代共有語彙の語彙量、⑤世代特有語彙の語彙量を整理したものが表2である。

まず、①で二人ともを使うと回答のあった語(○の語数)と一人のみの回答のあった語(△の語数)を見ると、老年層と青年層とでは、語数の比に違いが存している。すなわち、老年層では△の語数が、玉名市方言を除く三地点で多くなっているのに対して、青年層では四地点ともに○の語数が△の語数にまさっているのである。これは青年層が老年層に比べてその個人差が小さくなっていることに起因している。

話	地点 世代	玉名市		阿蘇町		八代市		本渡市		地点数		人 数		備 考
		老	青	老	青	老	青	老	青	老→青	老→青	老→青	老→青	
01.	ソーニヤ	○	○	○	△	△	△	○	○	4→4	7→6	地点と世代を次の数字で表す。(玉名市方言 1 阿蘇町方言 2 八代市方言 3 本渡市方言 4) (老年層 1 青年層 2)		
02.	ソーン	△	○			△	△			2→2	2→3			
03.	エライ	○	○	○	○	○	○	○	○	4→4	8→8	01~37. 状態程度も表す。		
04.	エレ	△	△	○	○	△	△	△	△	3→3	4→3	04.) エライに比べると		
05.	エロー	△		△	△	△	△			3→1	3→1	05.) くれた言葉。(1-1)		
06.	タイギヤ	△		○	○	○	○	○	○	4→3	7→6			
07.	タイゲー			△	△					1→1	1→1			
08.	タイガー						△			1→0	0→1			
09.	タイヤー									1→0	2→0			
10.	ターギヤ	○	△							1→1	1→1	10. 若い者の言葉。(1-1)		
11.	タイギヤニヤ	△	△	○		△		△		4→0	6→0			
12.	チャーギヤニヤ	△	△							1→1	1→1	12. 古い言葉。(1-1)		
13.	イサギー	△	△	△	△					2→1	2→1	13. 「イサギ ヨー」は人間が達者で 元気の良いいことを表す(2-1)		
14.	イサゲー			○	○					1→0	2→0			
15.	イサギュー	○		○		○				3→0	6→0			
16.	ヒド	△				△		○	△	3→1	4→1			
17.	フド							△	△	1→0	1→0	17. 年寄りの言葉。(4-1)		
18.	ムゴ	○		△		○		△	△	4→1	6→1			
19.	ヨ	○	○	△	○	○	○	△	○	4→4	6→8			
20.	ユ	○		△		△		△		4→0	5→0			
21.	シゴ					△				1→0	1→0			
22.	ソート	○	○	△	○	△	○	△	○	4→4	5→4			
23.	トテン			△	○					1→1	1→2	23. 古い言葉(2-2)		
24.	タイソ	○	△	△	△	△	○	△		4→3	5→4			
25.	タイソバツカイ							△		1→0	1→0			
26.	マコテ			△						1→0	1→0	26. 本当にとくさん。古い言葉。		
27.	スゴク	○	○	○	△	○	△	○	○	3→4	4→8	27. 上品な言葉(全)。若い女性が使う(2-2)		
28.	モノスゴク			△	△	△	△	△	○	1→4	1→5	28.) 丁寧な言葉。		
29.	モノスゴ	△	△	△	△	△	○	△	○	3→4	3→6	29.)		
30.	ズイブン	○	○	△	○	△	○	○	○	4→4	6→8	30. 上品な言葉(全)		
31.	オンロシユ	○		△		△		△		4→1	5→1	31.) 恐ろしいほどとくさん		
32.	オッソロシユ	△				△		△		2→0	2→0	32.) 32. オンロシユより程度大		
33.	トツケムニヤ	○	○	○	○	○	△	△		4→3	7→5			
34.	トツケンニヤ					△				1→0	1→0	33.) 思いがけないほどとくさん		
35.	カンガムニヤ			△						1→0	1→0	34.)		
36.	ホーカラシユ	△								1→0	1→0	35. 負の評価を伴うことが多い。古い言葉。		
37.	ホーゲラシユ	△								1→0	1→0	36.) 予想以上にとくさん。古い言葉		
38.	ヨンニユ			○		△	○	○		2→2	4→3	37.)		
39.	ヨンニョ	○	○			○				2→1	4→2			
40.	ユンニユ					△		△		2→2	2→0	40. 古い言葉。		
41.	ウンニユ			△						1→0	1→0			
42.	ヨノン						○			0→1	0→2	42. 子どもの言葉。(3-1)		
43.	ヨーンコ	○		○		○	○	○		3→1	6→2			
44.	ヨンニユバツカイ					○	○	△		2→2	4→2			
45.	ヨノンバツカイ					△	△	○		0→1	0→1			
46.	ヨケーニ					○	○	○	○	2→2	4→4			
47.	ヨケイニ	○	△	△	○			○	○	4→4	7→7	47. 丁寧な言葉。		
48.	ヨケイ	△								1→0	1→0			
49.	ヨケー	○	○	○	○	△	△	○	○	4→4	7→7			
50.	ヨーケン					○	○			1→1	2→2	50. 玉のヨーケンは<数量の少>に所属する。		
51.	ヨケンバツカッ					△	△			1→0	1→0	51. 「ヨーケン」よりも程度大		
52.	ヨーケ	△		○	△	△	○	○	○	4→3	6→5	52. 「イッパイ」に比べてやや下品(全)。 「ヨンニユ」より程度大。		
53.	イッピヤ	○	○	○	○	○	○	○	△	4→4	8→7	54. 上品な言葉(全・老) 若い女性がよく使う。		
54.	イッパイ	○	○	○	○	○	○	△	○	4→4	7→8	55. 古い言い方(3-1)		
55.	イッペ			○		△				2→0	3→0	56. 限界まで		
56.	ハライッピヤ	△						△		2→0	2→0	57-58-59. 「イッピヤ」より程度大。		
57.	ホイッピヤ	○	○			○				2→1	4→2			
58.	ホイッパイ					○				0→1	0→2			
59.	ホイッペ			△		△				2→0	2→0	59. 昔の言葉(3-1)		
60.	セッピヤ							△		1→0	1→0	60.)		
61.	セツパ							△		1→0	1→0	61.) 精いっぱい		
62.	セツピヤバツカイ							○		1→0	2→0	62.) 131. セツピヤ・セツパより程度大。		
63.	メイッパイ				△			△		0→2	0→2	63. 若い女性がよく使う。		
64.	エツト							*		1→1	2→2	64. 玉・阿・本のエツトは<数量の少>に所属する。		
65.	エツトバツカッ					○	○	△		1→1	2→1	65. 「エツト」より程度大。		
66.	ウント	○	○	△	○	○	○	△	○	4→4	6→8			
67.	ウントコセ	○		△		△		△		4→0	5→0	67.) 古い言葉。		
68.	ウントコシエ	△		△		△				2→1	3→1	68.)		
69.	アバカン	○		○	△	○		*		3→1	6→1	69. 容器に入りきれないほどとくさん。 液体の量には使わない。上品な言葉。		
70.	ギョーサン	△						△		2→0	2→0	71. 上品な言葉。		
71.	タクサン	△	○	○	○	△	○	△	○	4→4	5→8	イッパイの方をよく使う。(全・青)		
72.	ゴーギユ							○		1→0	2→0			

語	地点 世代	玉名市		阿蘇町		八代市		本渡市		地点数		人 数		備 考
		老	青	老	青	老	青	老	青	老	青	老	青	
73.	ホーラツ	○	△			△		○		3	→	5	→	73. } 負の評価を伴いやすい。
74.	ホラツ					△				1	→	1	→	74. }
75.	ホーラチ							△		1	→	1	→	75. }
76.	イサッカ	△	○							1	→	1	→	
77.	ゴツ							○	△	1	→	2	→	77. 古い言葉(2-2)
78.	フテーコツ	*		△		*				1	→	1	→	
79.	ゾンブン							△		1	→	1	→	79. 飲食の量について使うことが多い(4-1)。
80.	タツプリ	○	△	△	○	○	○	△	○	4	→	6	→	
81.	シッカリ	○	○							1	→	2	→	81. } 十分に
82.	シッキヤ	○	○	△				○	△	2	→	3	→	82. }
83.	オモサン	○	○	△		○	○	△		4	→	6	→	83. } 思う存分に
84.	オメーサミヤー	△								1	→	1	→	84. }
85.	カンギヤーナシ	△				△		○	△	3	→	4	→	85. } 考えもなくたくさん。
86.	カンガエナシ							○	○	1	→	2	→	86. } 負の評価を伴いやすい。
87.	キンナシ	○				△	△	△	△	3	→	4	→	87. }
88.	キリナシ							○		0	→	0	→	88. } 限りなくたくさん。
89.	キヤーナシ					△				0	→	0	→	89. }
90.	バサリヤー	△								1	→	1	→	90. } やたらにたくさん。程度大。
91.	バサロー	△								1	→	1	→	91. } 負の評価を伴いやすい。
92.	バサレ			○						1	→	2	→	92. }
93.	ホクソー	△		△						2	→	2	→	93. } やたらにたくさん
94.	ホクソニ	△								1	→	1	→	94. } 負の評価を伴いやすい。程度大
95.	ホッポー	△								1	→	1	→	95. }
96.	ホッポーニ			△						1	→	1	→	96. } むやみやたらに。負の評価を伴いやすい。
97.	ホッポホーライ			△				*		1	→	1	→	97. } 97. 本には仕事の雑な人を表す。 「ホッポホーライサン」がある。
98.	ヤタラ	△	○					△		2	→	2	→	
99.	ヤタラニ			○				△	△	3	→	4	→	98. }
100.	ヤタリヤ	○	△			△		○		3	→	5	→	99. } やたらにたくさん。
101.	ヤタラクカカリヤ	○	○							1	→	2	→	100. } 負の評価を伴いやすい。
102.	ヤタラカタリヤ	○	△							1	→	2	→	101. } 170.171.「ヤタラ」より程度大。
103.	ヤリバナシ	△		△						1	→	1	→	102. }
104.	ヤルバナシ	○	△					△		2	→	3	→	103. } やたらにたくさん。
105.	ヤルカンボニ	○	○							1	→	2	→	104. } 負の評価を伴い易い。
106.	イッピヤコッピヤ	○	△	△		△	△	○	△	4	→	6	→	105. }
107.	イッベコッベ			△						1	→	1	→	106. }
108.	イッバイコッバイ			△	△			△		2	→	2	→	107. } あちこちたくさん。176.昔の言葉。(2-1)
109.	イッバコッバ							△	△	0	→	0	→	108. } 108.若い人が使う。(2-2)
110.	シコタマ	△		△	△	△		○		3	→	3	→	109. } 109.若い人が使うことが多い。
111.	タンマリ					△		△	△	2	→	2	→	112. } 飲食について用いることが主。
112.	タラフク	△	△			△	△	△	△	3	→	3	→	113. } 113. 食べられるほどたくさん。液体の量について専ら用
113.	ガンブリ	○						△	△	2	→	4	→	いる。
114.	ザックラート							○		1	→	2	→	114. } 雨など水気が十分に。
115.	ザックラット							△	△	1	→	1	→	115. }
116.	ベツタリ	○		△		○		○	△	4	→	7	→	116. }
117.	ビツタリ	△				○				2	→	3	→	117. } すきまなくたくさん。
118.	ピツシヤリ	△	○	○				○		3	→	5	→	118. }
119.	ピツシリ			△		△	△	△		1	→	1	→	119. } あきまなくたくさん。詰まつてたくさん。
120.	グッサリ	○	△	△	△	△	△	△		4	→	5	→	120. }
121.	グッサル	△								1	→	1	→	121. } 量感が伴う。
122.	グサット			△		△				0	→	0	→	122. }
123.	ドッサリ	○	○	△	△	△	○	○	○	4	→	6	→	123. }
124.	ドッサル					△				1	→	1	→	124. } 品物の数量について用いることが普通。
125.	ドッサイ				△		○			0	→	0	→	125. }
126.	ドシコデン	○		○	○	○	○	○	○	4	→	8	→	126. } イクラデンに比べ土地言葉の意識が強い。
127.	ドシコデモ							△		1	→	1	→	
128.	ドガシコデン	○	○					△	△	2	→	3	→	
129.	イクラデン	○	○	△	○		○	○	○	3	→	5	→	
130.	イクラデモ	○	○	△	○	△	○	△	○	4	→	5	→	130. } イクラデンよりも上品な言葉。(全)
131.	ナンボデン							△		1	→	1	→	131. } 老人の言葉。(4-1)
132.	ナンボデモ	△								1	→	1	→	132. } 土地言葉として上品な言葉。
133.	ドガシコツチャ	△	△					△		2	→	2	→	
134.	アラアラ							△	△	1	→	1	→	
135.	ダイタイ	○	○		○	○	○	△	△	3	→	5	→	
136.	タイガイ				○	○	○			2	→	4	→	
137.	テーゲ			△						1	→	1	→	137. } 古い言葉。
138.	タイガイゴロ			△						1	→	1	→	138. } 満足すべき程ではないが 納得できるぐらいの数量。
139.	タイテー			△		△		○	△	3	→	4	→	
140.	ダイブン	○	○	△		○	○	○	○	4	→	7	→	
141.	ダイブ	△				○	△	○	○	2	→	2	→	
142.	ジャーブン	○								1	→	2	→	
143.	ホトンド	○	○	○	○	○	○	○	○	4	→	8	→	143. } 共通語(全)
144.	ゴツポリ	△		△						2	→	2	→	144. } 全部に近い数量。
145.	エッコリ					○				1	→	2	→	145. } 80%位の数量。人の顔が似ていることにも使う。

語彙量を比べると、いずれの地点でも老年層が青年層の語彙量を上回っている。しかし、③に見るように老年層から青年層へ語彙量が減少している点では共通しているが、その比率は一定ではなく、例えば八代市方言では80.9%と高く、反対に玉名市方言では51.8%と低くなっており、地点ごとに凸凹がある。

表2

地 点	玉名市		阿蘇町		八代市		本渡市	
	老	青	老	青	老	青	老	青
① ○ の語数	48	26	24	25	28	34	29	26
△ の語数	37	18	40	16	40	21	43	17
② 世代語彙量	85	44	64	41	68	55	72	43
③ 青/老 %	51.8%		64.0%		80.9%		59.7%	
④ 世代共有語彙	41		33		43		37	
⑤ 世代特有語彙	44	3	31	8	25	12	35	6

一方、老年層と青年層との二つの世代の共有語彙は四地点を通じてほぼ一定である。⑤に見るように世代特有語彙は当然のことながら老年層の方が、いずれの地点でも青年層よりも多い。

地点ごとの語彙量は、老年層に比べて青年層の方がその凸凹が小さく、安定した状態にあると言うことができよう。○と△の語数と考え合わせると、老年層では各地点で方言の変容（共通語化、方言の衰退）が依然として進んでいる「動」の状態にあり、青年層では一応捨てるものは捨て、受容するものについては受容した、いわば安定した「静」の状態にあるのではなからうか。

4. 地点数の変化

表1に示した145語について、老年層と青年層との分布する地点数を比較するとき、次の①から⑤に見分けることができる。

- ①認められなくなったもの……………61語
- ②認められる地点数が減少したもの……………31語
- ③認められる地点数に増減がないもの……………36語
- ④認められる地点数が増加したもの……………7語
- ⑤新しく認められるもの……………10語

この内実について老年層の地点数を縦軸に、青年層の地点数を横軸にとって整理したものが表3である。

→	青 年 層					計	135
	4 地点	3 地点	2 地点	1 地点	0 地点		
老 年 層	4 地点	16	7	1	3	3	30
	3 地点	4	3	2	9	1	19
	2 地点	0	1	5	9	12	27
	1 地点	1	1	0	12	45	59
	0 地点	0	0	4	6		10
計		21	12	12	39	61	145
			84				

表3において点線に囲まれた部分が③、中央より上側が①②、下側が④⑤に所属する語数をそれぞれ示している。①と②とを合わせて92語、全体の63.5%にあたる語が青年層に

において認められなくなったり、或いは地点数が減少したりすることによって、その勢力を失っているのである。しかし、わずかに17語 (11.7%) であるが、青年層で新しく認められる語や地点数が増加した語が存しており、一方的に減少するのではなく、そこには新しい動きもまた同時に見ることができる。

ここで注目すべきことは、認められなくなったものの大半が老年層で1地点にがぎって認められた語である点である。分布域の限られた語は青年層に受容されにくい傾向が存する。

5. 語形 —— 方言形と共通語形 ——

表3のそれぞれの枠に所属する語を、その語形に注目して方言形と共通語形の二つに分けて示したものが表4である。なお、判断の難しい語については括弧に入れた。

表4

老-青	語数	方言形	共通語形	
1	4-4	16	ゾーニャ エライ ヨー ヨケー イッピヤ	ソート ズイブン ヨケイニ イッパイ ウント タクサン タツプリ ドツサリ イクラデモ ダイブン ホトンド タイソー
2	4-3	7	タイギヤー トツケムニャー ヨーケ イピヤコツピヤ グッサリ ドシコデン	♠
3	4-2	1	オモサン	♠
4	4-1	3	ムゴー オソロシユー ベツタリ	♠
5	4-0	3	タイギヤニャ ユー ウーントコセ	♠
6	3-4	4	イクラデン	スゴク (モノスゴ)
7	3-3	3	エレー	ダ イタイ
8	3-2	2	キンナシ	ダラフク (タイテー)
9	3-1	9	エロー ヒドー ヨーニコ アバカン カンギヤーナシ ホーラツ ヤタリヤ ビツシャリ	(シコタマ) ヤタラニ
10	3-0	1	イサギユ	♠
11	2-4	0	♠	♠
12	2-3	1	♠	(ダ イブ)
13	2-2	5	ソーン ヨンニユ ヨンニユバツカイ	(ヨケーニ) タイガイ
14	2-1	9	イサギー ヨンニョ ホイッピヤ ウートコシェ ヤルバナシ イッパイコツパイ ドガシコデン ドガシコツチャ オッソロシユー ユンニユ イッペー ハライッピヤ ホイッペ ギョーサン シツキヤ ホクソー ガンプリ ビツタリ	(ヤタラ) タンマリ
16	1-4	1	♠	モノスゴク
17	1-3	1	♠	ビツシリ
18	1-2	0	♠	♠
19	1-1	12	タイゲー ターギヤ チャギヤニャ トデン ヨーケン エット エットバツカッ イサッカ ゴツー ヤタラカタリヤ ヤリバナシ ヤリバナシ	♠
20	1-0	45	イサゲー フドー シゴー タイソバツカイ マコテー イツケンニャー カンガムニャー ホーカラシユー ホーグラシユ ウンニユ ヨケンバツカッ セツピヤ セツパ セツピヤバツカイ ゴーギユ ホラツ ホーラチ フテーコツ シツカリ オメーサミャー ガンガエナシ バサリャー バサロー バサレ ホクソニ ホッポー ホッポーニ ホッポホーライ ヤタラクワタリヤ ヤルカンポニ イッペコツペ ザツクラート ザツクラット グツサル ドツサル ドシコデン ナンポデン ナンポデモ テーゲ タイガイコロ ジャープン エッコリ	(ヨケイ) (ソンプン)
21	0-4	0	♠	♠
22	0-3	0	♠	♠
23	0-2	4	イッパコツパ グサツト ドツサイ	メイッパイ
24	0-1	6	タイガー ヨンノ ヨンノバツカイ キヤーナシ	♠

四地点に分布する語（老年層30語、青年層21語）について、方言形と共通語形との語数の比率を見ると、老年層では「18:12」と方言形が上回っているのに対して、青年層では「6:15」と共通語形が多くなっており、青年層になると方言形が失われ、共通語形が中心になっている事実を指摘できる。しかし、ソーニャ、エライ、ヨー、ヨケー、イツピャ、イクラデンなど方言形が青年層において全く排斥されるのではなく、なんらかの事由によって残るべきものについては残り、確かに受容されているのである。

まとまりのある語群を例にしてみると、表1の126から133の不定量を表す語のうち、ドシコデン、ドガシコデン、ナンボデン、ドガシコッチャは衰え、反対にイクラデン、イクラデモが盛んになっている。^{*3} やはり共通語(的)なものが方言形を駆逐しようとしている。

また、青年層において認められる地点数が増加したものは、表4の12・16・17・18に示したイクラデン、スゴク、モノスゴ、ダイタイ、ダイブ、モノスゴク、ピッシリの7語である。ここにもやはり共通語形の勢いが見られる。

反対に青年層で認められなくなったり、地点数が減少したりした語を見ると、口蓋化したり、ヤタラクッタリヤなど合拗音を含んだものや、例えば文例06のウーントコセのように語形の上で（音声の上で）いかにも「方言」といったニュアンスを持った語が大半を占めている。

06. アオヤサイ ウーントコセ タイタッチャ スコーシカ ナカッジャ モネー。

(4-1) 青野菜をたくさん煮ても少ししかないんだもの。

一方、多くの語が認められなくなったり、地点数が減少する傾向の中で、老年層には認められず、青年層で新しく認められたものが10語ある。共通語形としてはメイッパイ一語であり、他は方言形である。メイッパイは「56.ハライツピャ」から「62.セツピャバツカイ」の一連の語と同じく「限界まで」といった意味の特徴を持ち、若い女性がよく使うという説明を得ている。「ハラ～、ホ～、セ～」の持つ方言的なニュアンスを避けたものであろう。方言形は音変化によるものばかりであり、例えばタイガー、ヨンノのように拗音の直音化、ドツサイのように最終音節のr音の脱落、グサツトのように「～ト」のものが生まれている。この10語のうち8語までが八代市方言で得たものであり、さらに詳しい調査が必要であるが、熊本県方言の中にあっても青年層に注目する時、その動態に興味深い地域性が認められそうである。

6. 意味・用法

以上検討してきたように老年層と青年層を比較すると、青年層で語彙量が大幅に減少しており、青年層特有語彙はきわめて少なかった。また、語形としては方言形の割合が減り、逆に共通語形の割合が高くなった。ここでは意味・用法の観点からその変化を見てみよう。

老年層で2地点以上に認められたが、青年層で認められなくなったものが、表4の5・10・15に示したように16語ある。語形の上ではタンマリを除き方言形である。タイギヤニャ、ユー、イサギュー、オツソロシューは状態程度にも関わることのできるものであるが、青年層の4地点に認められるソーニャ、エライ、ヨー、スゴク、モノスゴクとほとんど語義の相違はなく、文体的な特徴としていかにも「方言」的な陰翳を持ったものである。また、ウーントコセ、ユンニュ、イッペー、ギョーサンなどはウント、ヨケー、イツピャ、イツ

パイ、タクサンなどがあれば十分に事足りるものである。

次に老年層において四地点のうち一地点でのみ認められた語を見てみる。ここには音訛によって特有語彙になったものと造語発想を異にするによって特有語彙になったものとの二つがあるが、ここでは後者に属する語をいくつか取り上げる。

玉名市方言のホーカラシュー・ホーグラシューは予想外に多かったことを表し、阿蘇町方言のフテーコツ*⁴はきわめて多いことを表す。

07. アン トキャ フテーコツ モーケタ バナー。(2-1)

あの時はたくさん儲けたよ。

また、本渡市方言のゾンブン*⁵は専ら飲食の量について用いるようである。同じく本渡市方言のザックラート (ザックラット) は雨などの水分が十分にあることを表す。

08. モー ゾンブン ゴツツォ ナリマシタ。ゾンブンデシタ。(4-1)

もう十分ご馳走になりました。十分でした。

09. ザックラート ハタケン シメルゴテ フレバ スズシュー ナットジャッター。

(4-1) 十分に畑が湿るように (雨が) 降れば、涼しくなるのに。

八代市方言のエッコリは全体の八割程度の概括量を示すとともに、人どうしの顔がよく似ていることを「エッコリ ニトル」などと言う。

10. エッコリ モッテ イカシタ。(3-1)

認められる地点数が減少したもののなかでいくつか取り上げてみる。「43. ヨーンコ」は大人から子どもに対して使う、いわば育児語である。「69. アバカン」は容器などに入りきれなくこぼれるほどに多いことを意味する。「83. オモサン」は思う存分にたくさんということを表し、命令表現のなかに用いられやすい。

11. イサギー アカバン アッ タイ。(3-1) とてもたくさんありますよ。

12. モー オモサン モッテ イキナハル。(1-1) もうたくさんもっておきなさい。

こういった意義特徴に特色のある、いわば「個性」的な語は青年層で受容されにくい傾向をここに指摘することができる。

方言形の多くは、単に属性としての〈数量の多〉を表すのみならず、表現主体の「感情」を濃厚に表出する傾向がある。例えば文例13、14のホーラツ、カンギヤーナシはきわめて数量の多いことを示し、往々にして常識をこえ、かえって迷惑するほどの数量であることを表す。そこにはその〈数量の多〉を喜ばず、逆に忌む表現主体の感情が伴っている。

13. ホーラツ クモン デトルケ ニワカアメワ フリヤ センド カ。(1-1)

やたらにたくさん雲が出ているから、にわか雨は降りはいしないだろうか。

14. カンギヤーナシ トッテ キテ ドギヤ スッ カイ。(4-1)

やたらにたくさん (魚を) とってきてどうするのかい。

このようにマイナスの感情を纏って対象の数量を捉え表現するものが多い。一方、共通語形のもの方言形に比べて表現主体の「感情」の表出の面は薄く、その程度性に重きがあって、対象の客観的な属性としての数量を言い表そうとするものが普通のようなものである。

地点方言の構造の中ではどのようになっているのであろうか。玉名市方言を例にとりて見てみる。表2にみるように、老年層85語、青年層44語であり、青年層は老年層の51.8%

の語彙量に減少している。老・青の共有語彙が41語で、老年層特有語彙が44語に対して、青年層特有語彙はモノスゴク、ピッシリ、グサットのわずか3語のみである。青年層において二人とも使用すると回答のあった語（表1の○印の語）26語に注目すると、それぞれによく似た意義を持つ語群のなかの特定の語が受容されているようである。

例えば01～37の状態程度にも関わることができる語群のなかでソーニャ、ソーン、エライをはじめ8語に、38～84の数量概念を持つものの中ではヨンニョ、ヨケー、イッピャ、イッパイなど9語であり、85～125の情態性のもものではヤタラ、ピッシャリ、ドッサリの3語、126～133の不定量を表すものではドガシコデン、イクラデンなど3語、134～145の概括量を表すものではダイタイ、ダイブン、ホトンドの3語にしばられている。

老年層の豊かな身が削ぎ落されて、いわば骨組みが残った「疎」の状態である。このことは若干の異なりがあるにしても四地点方言に共通したことである。ここに老年層では多くの語を用いて細かく捉え、表現し分けようとするのに対して、青年層では特定の少ない語を以て多くの事態の数量を捉え、表そうとする傾向を指摘できようか。

7. 地域性

ここでは地域性の観点から捉えてみる。各地点方言において青年層に語彙量の減少があった。また「4. 地点数の変化」のところで述べたように、個々の語に認められる地点数に大きな変化が存していた。これは老年層と青年層とでは地域性の上において何らかの相違があることを示している。

青年層になると相対的に四地点間の共有語彙の割合が高くなり、地点特有語彙は少なくなっている。一地点に限って認められる語は青年層で39語であるが、このうち21語は地点数が減少した結果のものである。また、老年層で3地点に認められるものが19語、2地点に認められるものが27語であり、青年層の3地点に認められるもの12語、2地点に認められるもの12語に比べて語数が多く、各地点の間の共有語彙が多く存し、それだけ地域性が明白である。青年層で2地点、3地点の共有語彙となっているものや、一地点に限って認められる語の多くは、例えば「83.オモサン」は老年層において四地点に認められたが、青年層では玉名市方言と八代市方言の二地点になっているように、老年層で多地点に認められたものが、青年層になっただけの地点で語彙が失われることによって生じた「消極的な地域性」とでも呼ぶべきものである。

語形の上では地域性を示していた方言形が失われ共通語形が増した。

このように地点方言の特有の語彙が多く失われ、反対に数地点にわたって分布するいわば地域共通語や全国共通語の占める割合が大きくなった為に、語彙量の減少と相まって地域性も薄くなったと考えられる。

熊本県方言の周辺へ目を転じてみる。老年層においては、本渡市方言は例えばゴーギュ、ゾンブンのように島原方言をはじめとする長崎県方言に繋がる語があり、阿蘇町方言はフテーコツのように大分県方言に共通する語が見られる。他の方言形の語も肥筑方言で広く分布するものが多い。方言形が青年層で消滅したり衰退することによって、周辺域とつながりを示す主なものが共通語形となって、地域性が色褪せてきているのではなからうか。

8. まとめ

以上、〈数量の多〉を表す数量関係の副詞語彙という意味的に近似した語のまとまりを、方言類義語として捉え直して、老年層と青年層との比較によってその世代差を明らかにした。老年層では語彙量も多く、意義の面や感情の面で、〈数量の多〉という対象の状態をきめ細かく捉え、表現し分けているのに対して、青年層では語彙量も減少し、意味構造も語数の減少に伴って疎になっていた。特定の語を以て多くの事態の〈数量の多〉を表そうとする傾向が存している。言うなれば「密な状態」から「単一的で疎の状態」への変化であり、そしてそれはいわゆる共通語化という波に洗われ続ける地点方言にあって、方言形の「消滅、衰退、生起」と共通語形の「受容、増加」といった両者のせめぎあいの結果至った、ある程度安定した状態と言うこともできようか。

青年層はこれから地域社会に参加して行くにしたがって、地域社会の言葉を獲得していくことは十分に考えられるものの、今後、老年層の語彙がそのままそっくり各地点方言で受容されることはないであろう。先に見たように老年層では個人差が青年層よりも激しく、すでに「ゆれ」が起こっていた。一方、わずかであるが、青年層に音説形や派生形が生まれ新しい語が創り出されている。

就職や進学のために故郷を離れることが普通のこととなった現在、大半の若者にとって従来の地域方言を習得し自分のものとする機会は少なくなってしまった。よしんば地域社会に残っても、経済的なことや交際上のことなどさまざまな事由によって、限られた狭い地域の中だけにとどまった自足した生活はかつてのことであり、広い範囲を行動領域とした生活が、交通網の整備や高速化と相まって普通のこととなった今、人と人との交流もかなりの広がりを持った地域のなかでのものとなり、はたまたテレビやラジオといったマスコミュニケーション、文化的・教育的な活動等々によって、熊本市を中心としたいわゆる、「熊本県地域共通語（「熊本弁」）」が勢力を広げている。それらの事実と直接的にあるいは屈折的に即応するかたちで、各地点の方言語彙もまたその質と量とをたえず変化させつつあり、今後、熊本県方言内の地域性はますます薄れてくるものと推量される。しかし、のっぺりとしたまったく単一的な状態となることは当然ながらないであろう。なんとすれば、地理的な広がりがあるかぎり、その土地に働く人々の生活には区々の差が存し続けるからである。その変容のあり様を見つめていきたいと考えている。

注

(注1) 方言語彙の共通語化について、中條修氏は「共通語化の動向——静岡県の言語調査から——」（『意味論研究会会報』vol.8,no.6）で、共通語化の程度に分野による違いに二つのタイプのあることを指摘している。一つは「分野による片寄りが小さく、バランスのとれた形で緩やかに進行するタイプ」で、もう一つは「分野によって片寄りがあり、アンバランスの形で揺れ動きながら進行するタイプ」である。〈数量の多〉という一つの狭い分野のなかでも共通語化しやすい部分とにくい部分とが見受けられるようである。

(注2) 前部の数字が地点を後部の数字が年層を示している。すなわち前部の1＝玉名市

方言、2＝阿蘇町方言、3＝八代市方言、4＝本渡市方言であり、後部の1＝老年層、2＝青年層である。したがって(1-1)は玉名市方言の老年層から得た文例であることを表している。

(注3) 国立国語研究所『日本言語地図』第1集の第49図「いくつ(個数)」、第50図「いくら(値段)」の二つの地図を見ると、熊本県下では「イクラ」が勢力を持っている様子をうかがうことができる。

(注4) 玉名市方言や八代市方言でもフテコツという語形は得たが、「フテコツ ユー」といった連語形式で実力が伴わないくせに大きなことを言うことを表す性向語彙であり、意味が異なっている。大分県方言では阿蘇町方言と同様に〈数量の多〉を表している。

(注5) 長崎県長与町方言と島原市方言でハラゾンプン、ハラドンブンを得ている。ハラ()と結合して、飲食の量ということに限定されている。

付記

本稿は平成3年度方言研究ゼミナール(於・広島市、1991.4.27)に於いて口頭発表したものに加筆したものである。席上、神部宏泰先生、佐藤亮一先生をはじめ多くの方々から貴重な御意見を頂いた。また成稿にあたっては室山敏昭先生に懇切な御指導を賜った。ここに記して御礼申し上げる。